

講演会・朗読会の報告

『ドイツにおける文学批評
— 現在的なひとつの見通し』

Hubert Winkels: Literaturkritik in Deutschland — ein aktueller Überblick

佐 藤 正 明

フーバート・ヴィンケルス氏は、1988 年以来「Die Zeit」に文学批評を寄稿され、97 年以降は「Deutschlandfunk」の文学編集者も務められるほか、96 年からは文学レポートのテレビ番組も司会されている。また、97 年には著書『Leselust und Bildermacht. Über Literatur, Fernsehen und neue Medien』を出版され、98 年にエッセン大学、99 年から 2000 年にかけてゲッティンゲン大学にて客員教授を勤められるなど、現在ドイツでもっとも広範に活動されている文学批評家のひとりである。このたび早稲田大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻では、2003 年春に来日された氏をお招きし、ご講演いただく機会に恵まれた。以下、このときの講演内容を紹介し、次いでその際に交わされた議論について報告する。

ドイツでは文学批評の中心的な場は新聞であり、新聞社も文化ジャーナリズムの中でとりわけ文学批評に特別な地位を与えている。新聞を中心に展開された文学批評は、歴史的な参照体系に基づいて歴史と現在とを仲介する役割を果たし、また文学作品をきっかけとして始まる政治的歴史的な自己理解の議論に論争の場を提供してきた。批評をとおして形成された文学共同体には従来ドイツ社会の中で特別な意義があった。批評家、作家および作品、読者によって構成されるこの共同体は、政治的共同体も含めたさまざまな社会的共同体の基盤をなしてきた。それゆえ、文学批評の形態と意義がズレるならば、歴史と現在についての公衆の意識も変化するだろう。本公演でヴィンケルス氏は、さまざまなタイプの批評家に焦点を当てながら、ドイツで生じている文学批評の変遷の特徴を示した上で、モラルや政治へと続く文学共同体の重要さのためにかえって見過ごされてきた問題、つまり文学の分野で市場が果たす役割を指摘された。

古典的な文学批評家には、活動の方向づけに応じた典型がある。読者の興味をある本へと向けさせ、文学作品と公衆とを仲介することを課題としている批評家は、芸術内部に近づき過ぎることを避けようとするが、それによって多数の公衆を代表する芸術の裁判官としての役割を果たしてきた。この対極にあった別の典型が、芸術内部のディスクールへと向かう批評家である。しかし、ヨーロッパにおいて政治的な二極構造が崩壊し、各分野で脱中心化の傾向が強くなると、保守層とアヴァンギャルドとの間にあった硬直した対立も解消することになった。政治的な極性の解消は文学の分野にも方向喪失の危機をもたらした。批評家のもうひとつの典型、作家としばしば同世代に属しアイデンティティーを共有する批評家は、この危機を解放と解釈し、作家たちに転向小説を呼びかけた。作家たちも

政治的歴史的な場へと以前にも増して強く介入した。しかし、文学とその批評の意義自体も周縁化の傾向を免れず、芸術作品もまじめには受け取られなくなっていく。その一方で、文学的分野全体にとって出版市場の占める意義が前面に現れてくる。

市場の側面から見れば、他の文化的品物と同じように文学もひとつの消費対象であり、書籍も商品である。作家・批評家・公衆の三項構造は、生産者・販売者・顧客として表現される。この配置では文学批評家とは販売エージェントであり、公衆の趣味と意見を形成するという課題は一種の商品テスト機構として表現される。エージェントとしての批評家は出版社の経済的な事情に通じ、市場の動きを想定し、本の成果の回転軸のひとつを担っている。市場の影響力の増大は批評の形式も変化させつつある。古典的な文学批評の主要な形式は書評と文学的エッセイであったのに対して、最近ではとくにインタビューと作家紹介、ベストセラーリストも含めた文学推薦が増えつつある。これらの形式は週刊誌と雑誌で特に優遇されてきたが、最近では日報紙でも増加している。このように個人に焦点を当てる形式は、古典的な批評ではただ周縁的でしかなかった。この新しい傾向では、芸術作品が市場で得ることになる成果があらかじめ想定されていて、これに従って批評がなされる。本の売れ行きを上げ作家を著名にするこのやり方は、文学を活性化させる一方で、ポピュリズムをもたらす。美的なコンセプトをめぐる自由な議論という古典的な批評の核心は変化しつつある。それに加えて、批評の形態はテレビやラジオなど各々のメディアの要請に応じてそれぞれの仕方で発達している。歴史と現在との仲介者の役割を果たしてきた文学批評の変化は、ドイツにおける歴史と現在の知覚にも影響することになるだろう。

このたびのヴィンケルス氏による講演では、ドイツにおける文学批評の変遷も含めた文学共同体のあり方の変化と、そこで市場が果たす役割との考察が2大テーマであったと言える。これらのテーマをめぐる交わされた議論をピックアップして紹介したい。古典的な批評にあった「作品か公衆か」という二者択一は、市場への方向づけにとって代わられている。これをよく示す特徴的な現象として、「スター」への方向づけという今日のポピュリズムが指摘された。ヴィンケルス氏によれば、問題は作家が芸術的成果によってスターになるのではなく、エージェントの意図によって造り出されていることである。原稿は想定された公衆の好みに応じて都合のいいような体裁をとり、公衆もそのようにして造られた作家へと方向づけられ、こうして現代小説家はテレビスターになる。出版社にとっても、古典文学を新たに出版することは採算に合わない。このようなしばしば悲観的とも取れる氏の現状分析に対して、次のように問われるのも当然であろう。すなわち、ドイツで文学が以前に果たしていたような役割はすでに失われ、またドイツ文学の水準全体も低くなり、批評家と作家は公衆の注目を集め本を売ろうとしてパフォーマンスをしているだけになったのかということである。氏は、読まれる本の水準が下がりつつある現状を憂慮しつつも、現在のドイツ文学の水準そのものが低下したとは考えていないと述べている。文学的分野のいわばマクロ構造を論じた本講演への議論には、すんなりと合意できるような結論は出ないだろう。